

2012年第九回日本語教育・日本研究シンポジウム
—日本語教育・日本研究：双方向的アプローチの実践と可能性—

The Ninth Symposium for Japanese Language Education and Japanese Studies:
Interactivity, Praxis and Possibilities

スラボフ・ペトコ（大阪大学大学院生）

紅葉館と外国人に紹介された能楽

キーワード：紅葉館；能楽；明治時代；外国人；饗応

要旨

明治十四年に、紅葉館と共に芝公園能楽堂が建設された。通称は紅葉館舞台だった。それと同時に紅葉館本館が賓客を饗応し、余興で様々な芸能を紹介していたが、本稿では、さらに詳しく紅葉館、芝能楽堂と外国人のことを紹介したい。

※ 紅葉館と外国人の接待

欧米の文化環境を作り上げ、外国人の接待と宿泊を目指した、明治十六年に建設された鹿鳴館の活動は周知のことであるが、その二年先に建設された紅葉館があまり知られていない。両館とも上流階級の接待を目的にしていたものの、鹿鳴館がその焦点を「海外文化」に当て西洋風に建てられたのに対して、紅葉館は海外のクラブハウスをモデルとして、その形を純粋な和風建設にし、接待や料理を京風とした¹。

この紅葉館は早くエリートの集会場となった。その集会には、日本鉄道定款完成の祝宴をはじめ、読売新聞創刊記念祝賀会、自由党懇談会などの記録が数多く残されている²。

¹ 長沢孝三 p109

² 池野藤兵衛『料亭東京芝・紅葉館 紅葉館を巡る人々』砂書房 1994年で詳細に見られる。

紅葉館は経営に何度か変化があったにもかかわらず、空襲で焼失した 1945 年まで活動を盛んに行っており、和風の社交施設として日本を訪問した外国人に日本の風習を紹介する役割も果たしていた。開業一ヶ月も経たないうちに、紅葉館は外国の最初の賓客を迎えた。ハワイ皇帝、カラカウア王が日本での表敬訪問の一つのイベントとして、明治十四年三月十三日に紅葉館を訪れた。その後、だんだん紅葉館が外国人の間で流行るようになり、『キーリングの日本ガイドブック』に紅葉館についての記述が載っている³：

「芝の増上寺から、西へ徒歩十分ぐらいのところ、紅葉館が位置している。丘の上に立っており、美しい並木道に囲まれているため、大勢の人を惹き付ける。」⁴

また、19世紀の80年代、紅葉館のお客としてエドワード・モースとヘンリ・ノーマンが見える。モースは『日本その日その日』⁵という日記に、その経験を述べ、紅葉館での宴会を描写している。もう一人のヘンリ・ノーマンは若いとき記者としてアジアを巡り、そのときの経験を元に『現実の日本』を著作した。その中に紅葉館についての記述が見られる：

「東京には紅葉館、所謂「Red Maple-leaf Club」というクラブハウスがあり、様々な政見をもつ卓越した中央紙の記者たちから成り立っている東京通信協会が、そこで月に一回集まる。記者たちと歓迎される光栄に浴した際に、夕食の後に何人かの踊り子が一連の舞踊を上演し、日本の独特の魅力だけではなく、どこでも賞賛される舞踏の才能を表した」。⁶

19世紀の90年代に入ると、外国人の間ではかなり人気があったようであり、「メイプルクラブ」として知られるようになった。有名な権力者や文化人はともかくとして、現存の記録にあまり残っていない人物さえ紅葉館で宴会を体験し、それを日記や旅行記の形で残している。

紅葉館は、外交官をも歓迎していた。アルベール・ダネタンがベルギーの大使をつとめたのは1893年から、1910年までで、1903年より外交団の団長もつとめていた。その死後、アルベール・ダネタン夫人が在任の間につけていた日記を出版したが、その中に外交団婦人のために催された宴会の記述が見られる：

³ 本稿で引用されてある全ての英文献は本稿の筆者が翻訳したものである。

⁴ Keeling, W. E. L. Fasari, A. *Keeling's Guide to Japan. Yokohama.* 1890. p.60

⁵ Morse, Edward S. *Japan Day by Day.* Vol. 2. Cambridge. 1917

⁶ Norman, Henry. *The Real Japan.* London. 1892. p 232

「1894年5月8日。今日は外交団の婦人のために、外交団の紳士方によって催された日本の夕食会に行った。接待で有名なメープルクラブで行われた。三十数人を呼ぶことができ、とてもおもしろかった。もちろん、靴を脱いで、床に座らないといけなかったが、この低い立場をどうしてもいやがる人には、椅子が用意された。小さくて、美しいネエサンが給仕をしており、刺繍を施した衣服を着た東京の最も熟練した芸者が舞った夕食中の舞踊も、魅惑的だった。日本の夕食では、料理は客前に置かれる漆器の盆に入っており、全てが同時に供され、客は各皿より、箸で一口の物をつまみ取るのである。」⁷

紅葉館は文人の接待所として、海外の文筆家を迎えたようである。ダグラス・スレードンはイギリスの作者で、よくその旅行記、特に日本に関する本で知られている。直接日本に関する旅行記は三つ出しているが、その最初の『在宅の日本人』⁸が15万部売れ、非常に流行して海外での日本のイメージに大きく影響した本の一つである⁹。明治22年12月15日に紅葉館の宴会に誘われ、その体験を『在宅の日本人』に記述した：

「(紅葉館は) その名前が暗示しているようにロンドンかニューヨークに追放されたカナダ人の協会ではなく、演劇があるリリッククラブ¹⁰に似たような会館である。そこで、大日本の官僚、貴族と富豪階級がチェスやドリントク、豪華な食事や遠き日本で最も優れた舞子で鋭気を養っている。

オーストラリア人に誘われたにもかかわらず、我々は日本の重要な出版社である博聞社の社長のK.長尾(長尾景弼(ながおかげすけ))に優遇され、クラブへの入場と娯楽を許された。」¹¹

しかしスレードンにとって最も印象的なのは舞踊だったようである。

「さて、舞踊の件に戻って、我々が理解しているそれとは違い、構えと無言の動きである。最初の踊り子が扇遊びを大量に見せた。賞賛すべき役者だった。上記の下層階級日本人のようではなく、日本の貴人らしきビー玉のような目、ワシ鼻、青白い卵形の顔で容貌が美しかった。彼女が演じて

⁷ D'Anethan, Baroness Albert. *Fourteen years of diplomatic life in Japan*. London. 1894, pp. 74-75

⁸ Sladen, Douglas. *The Japs at Home*. New York. 1892. (スレードンの最初の日本旅行記)

⁹ Sladen, Douglas. *Twenty Years of my Life*. London. 1914. p. 36

¹⁰ ロンドンのリリッククラブは1880年に設立されて人気のあったミュージッククラブである。参考：Hatton, Joseph. *Club-Land*. London. 1890. p. 45

¹¹ Sladen, Douglas. *The Japs at Home*. New York. 1892. p. 31

いるのは何らかの非劇だったが、それは、とどろく足踏みと前へ飛び出す姿勢で表現した熱情が導入部で始まり、続いて、すぼめた口や上がった顎、侮蔑で背けた目で表現された軽蔑として続いた。

(中略)

この舞踊は厭きるほど長くなく、一人を満足させるにちょうどいい長さであるので、人力車を呼び、靴を履く時間が来たことを、我々はまことに残念に思った。」¹²

その影響を受けたかどうかは言いがたいが、スレードンの後、紅葉館で宴会を体験し、舞を見た文化人が増えたようである。カテリーン・バクスターがその有名な旅行記の『竹の国にて』¹³紅葉館で経験した酒宴についての長い記述がある。バクスターも舞に焦点を当てている。在インド英国のハンプシャー連隊の大尉だったS. ジャクソンも、『日本への小旅行：極東での休暇九十日間』¹⁴で紅葉館の酒宴のことを述べ、食事よりも舞子の舞踊を見るのために行ったと記述している。

その後も、紅葉館は人気を浴び続けた。アンナ・ハーツホーンが明治期に、独特なる業績を残した人であり、新渡戸稲造に『武士道』の創作で手伝い¹⁵、津田梅子とともに日本の女子高等教育に手を加えた¹⁶。ハーツホーンは長い間日本に住み、新渡戸稲造の援助を得て『日本とその国民』を著作した。

「メープルクラブの芸者達は、東京で最もいい舞踊家であるという評判があり、観光客は普段、日本の食事を体験し、そして「蝶々」と「紅葉の踊り」を見に来る。店の全てが厳密に日本風であり、どんなことがあっても経営者は、カーペットを敷いて椅子やテーブルの使用を許さない。」¹⁷

紅葉館が政治界で重要な役割を果たした。外交団の宴会が主催されたことを前述したが、金融業者のジェイコブ・シフの手紙にも紅葉館についての記述が見られる。シフは日露戦争の時に大事な役割を果たした人で、彼の資金援助のおかげで日本が勝利を収め、1906年に明治天皇より最高勲章の旭日大綬章を贈られた¹⁸。その時の手紙が翌年に旅行記の形にされ、『日本までの我々の旅』の書名で奥さ

¹² Sladen, Douglas. *The Japs at Home*. New York. 1892. pp. 35-39

¹³ Baxter, Katharine Shuyler. *In Bamboo Lands*, New York, 1895, pp. 151-163

¹⁴ Jackson, S.C.F. *A Jaunt in Japan, or, Ninety Days Leave in the Far East*, Calcutta, 1899, pp.119-124

¹⁵ Nitobe, Inazo. *Bushido, the Soul of Japan*. Tokyo. 1907 (preface)

¹⁶ Takahashi, Yuko. *Umeko Tsuda and educational reform in modern Japan*. (?). 1989

¹⁷ Hartshorne, Anna C. *Japan and her People* Vol.1, Philadelphia, 1902, p.140

¹⁸ Adler, Cyrus. *Jacob Henry Schiff; a biographical sketch*. New York. 1921

んに出版された。紅葉館の記述は二つあり、綬章を贈られた三日後、紅葉館に招待された。

「純粹日本風に食事をして、その間に、くっくっと笑う我らの要求に深く注意を払う踊り子が給仕をし、別の女の子が上手で面白く現地の伝統舞踊をいくつか舞って見せてくれた。主に生と焼き魚や蒸した竹などの現地料理の数多い小さな皿から構成する夕食が、現地の飲料であるサキで流される。皆は、給仕や舞踊をする女の子の楽しいながら上品な振る舞いで満足して、上機嫌にホテルへ帰ったのが夜遅い時間だった。」¹⁹

ほぼ3週間後、4月18日の記述から、東京市長がシフのために宴会を主催したことがわかる。

「六時過ぎに紅葉館へ行き、東京市長と市議員が迎えてくれた。知事や何人かの婦人（そのうち誰も英語ができない）も参加した。最高級の日本料理が供され、不可欠な芸者が付き添っていた。晚餐の間、道化師と舞踊の面白いパフォーマンスがあったが、今まで純粋な日本らしい芝居を必要より以上見て、これが床に座ってお腹と好みに完全に合わない料理を食べる最後の晩であるという見込みで嬉しかった。」²⁰

その他に『日本の道路と住宅』²¹の著者、ケイス・ローソン婦人も紅葉館について長い記述を書き、上層階級の娯楽場として紹介し、日本の作法を説明している。宣教師として来日し、海軍兵学校や慶応義塾大学の教師となり、帝国大学でも英文学を教えていたアーサー・ロイド師も、その本『毎日の日本』²²で紅葉館で催される興行の芸術性を疑い、その客を冷やかしているが、ロイドの宗教教育を背景に思えば、それほど不思議ではない。

これまで紹介した外国人の宴会のことは、すべて海外で出版された旅行記や日記に記述しているものである。宴会のほとんどの場合は、知り合いに招待されたかたちで行われている。紅葉館が主に舞踊で人気を浴び、長い間日本の伝統的な宴会を体験できる娯楽場として観光客や訪問者の注目の的であった。

¹⁹ Schiff, J. H. *Our Journey to Japan*. New York. 1906. p. 58 (頁番号不表示)

²⁰ Schiff, J. H. *Our Journey to Japan*. New York. 1906. p. 136 (頁番号不表示)

²¹ Lawson, Kate, Lady. *Highways and Homes of Japan*. London. 1910 pp. 49-53

²² Lloyd, Arthur. *Every-day Japan*. London. 1909 pp. 224-225

※ 紅葉館・芝能楽堂と能を見た外国人のこと

芝公園にもう一つ大事な建物が紅葉館のそばにあった。それは芝能楽堂（紅葉館舞台）である。1881年に「能楽社」として開業し、1903年閉館されるまで「能楽堂」「能楽会」と二回改名された。

1881年、芝能楽堂の建設が終わり、舞台が開かれる前に、紅葉館本館で能が催されたのである。能楽社が同年4月16日に舞台が開かれたが、その一ヶ月前に、訪日中のハワイ皇帝のため、新開の紅葉館にて宴会が行われ、その間能も上演された。

「三・十六（三月十六日）〔東京日日〕去る十三日、紅葉館にて布哇帝を饗応し奉りし〔中略〕梅若実の連中が舞ひたる紅葉狩、猩々の二番の能は、兼て其の趣意がらを英文に書いて帝の御覧に入れて置きたるをもて、帝には謡曲の詞こそ解し給はね其の事柄はしかじかと悟り給へば、御眼を離さず篤と御覧ありて、折々奥に入らせ給ひぬ。げにこの能は日本の古風を存せしものか、何と無く立ち舞ふさまの気高く見ゆるものかなと賞し給ひぬ〔中略〕。又、梅若の連中が麻上下にて居並び、代る代るに仕舞を御覧に入れたるに、其舞の凜然として勇気を帯び立ち振舞の活発なるは深く御心に叶ひたりけん、実に実にこれぞ武士の舞ならめ、面白し面白しと幾度びか御意ありて、其終る毎に御手を拍ちて賞し給ひき。」²³

実に、能楽が紅葉館の見せ物の一つであったことは、また何箇所に見える。ハワイ王が訪日した同年の五月にも、紅葉館で行われた宴会に際して能が上演されたことがわかる。

「五・十八（五月十八日）〔郵便報知〕来る二十日、芝の紅葉館にて米人某へ饗応の為に催ふす能番組は、船弁慶（梅若実）、土蜘蛛（観世鉄之丞）、狂言は鞆猿。」²⁴

「米人」の名前だけではなく肩書きさえ書かれていないので、有名人であたかどうかが推測しがたいが、「能楽社」ではなく「紅葉館にて」饗応されると書いてあるため本館で余興能が催されたに違いない。

紅葉館が完成した当初、本館にての何らかの余興演能の記述がもう一つ、エドワード・モースの日記『日本その日その日』に見える。

²³ 倉田喜弘編『明治の能楽 1』日本芸術文化振興会、1994年、p.163

²⁴ 同上、p173

「六月十五日。ネット、チャプリンとヒュートン教授の送別会に行った。宴会は、芝公園に立っていて、日本人のクラブが管理している紅葉館という新しい建物で催された。〔中略〕食事はさすがに上等だった。終わる前に、古代日本の滑稽な演劇が紹介され、その一つは蚊の幽霊と戦う人の話だった。」²⁵

モースが観賞した古代日本の滑稽な演劇は狂言の『蚊相撲』だったと考えられる。

その後紅葉館で座敷風に催された能狂言の記述がしばらく見当たらなくなるが、明治三十一年4月28日の朝日新聞で、外国人饗応の記事にまた見える。

「外客饗応 〔1字不可読〕にシカゴ万国博覧会総裁たりしヒツギンボサム氏は婦人及び令嬢と共に本邦に来遊し目下帝国ホテルに滞在中なるを以て京浜間の紳商数十名は一昨日午後四時より同氏を芝区紅葉館に招き純粋なる日本風の饗応を為し主人は総て袴羽織を着し同館の茶室に於いて薄茶手前などあり余興には日本能楽三曲手品手踊等あり同氏は頗る満足せしよし又当日は井上蔵相も早川秘書官と共に相客として出席したりと」²⁶

能楽が三曲も上演されたことは、とても長い茶会だったと考えられる。

このように、明治期に紅葉館本館で上方舞や手品と並んで、能狂言が外国人のための余興として紹介されることがあったようである。紅葉館が建設された当初に、上記のような座敷の能の記述が見え、紅葉館で「ノウダンス」が見られることが、外国人の間に広がったようである。ここで、既に紹介した『キーリングの日本ガイドブック』をまた詳細に引用したい。

「紅葉館が花園に隔てられている隣り合わせの二つの建物から構成されている。一つ（ノラクド）は日本のオペラミュージックとノウダンス（能の舞踊）を専門にしており、観客に古代日本を紹介している。役者が皆現代中国のコスチュームを装っている。舞台は大きすぎず、原始風に建立されている。舞台の板の下に、大きな土器があり、役者が舞台を踏んだとき、不思議でありながら、やや楽しい音が響いてくる。壁にしっくりがなく、松や鶴の絵で装飾されている。演劇は毎週あり、前列への入場料金が30

²⁵ Morse, E. S. *Japan Day By Day Vol.2*. Boston and New York. 1917. p.213

²⁶ 『朝日新聞』1898年04月28日朝刊2頁「外客饗応」

銭。もう一つの建物（紅葉館本館）は紳士に茶屋として使われ、上流階級に支援されている。」²⁷

外国人の間で流行ったこのガイドブック自体が、芝の能舞台を「能楽堂」と呼んでいるが、両建物を紅葉館として紹介している。

さて、また既に紹介したが、スレードン氏も紅葉館の能に関する記述がある。その記述は、最初に著出した旅行記の『在宅の日本人』ではなく、後に出版された『さらに日本の不思議な事』の中にある。

「無知の旅行者には、日本の演劇が世界で最もつまらないことだろう。しかし、私はいいい見物者として〔中略〕東京のメイプルクラブで聖なる舞踊である能を見るために高い値段を払って、義務を果たした。あのアメリカ人が言ったように、この舞踊は舞踊ではない。（能は）日本舞台芸能の中で最も古い演劇であり、最近まで宮廷や華族の邸宅でしか見ることはできなかった。」²⁸

このエピソードは1889年末か1890年上旬のことを描いている。紅葉館が外国人の間の通称だった「メイプルクラブ」として紹介されているが、スレードンが本館、それとも能楽堂で能を観賞したか、明らかにされていない。

1893年に出版された『日本の音楽と楽器』にも紅葉館に関する記述が見える。

「現在は舞楽ならびに猿楽と狂言の舞踊家は東京を本拠地としており、よく公演を催すその劇場が、芝公園の紅葉館に隣接している。各種類の六か八曲が上演され、劇は午前10時に始まり、午後6まで続く。」²⁹

エリサ・シドモアが著作し、当時流布した旅行記の『日本にての人力車の日々』にまた小さな記述が見える。

「紅葉館というクラブハウスで美しい能の演出が見られる。その観客には、他で会うことのできない官僚や宮廷社会や華族が見られる。」³⁰

以前見えたように、紅葉館本館で能狂言が催されたのは饗応の際であるため、シドモアがここで「紅葉館」と言ったのはたぶん「能楽堂」のことであろう。当

²⁷ Keeling, W. E. L. Fasari, A. *Keeling's Guide to Japan*. Yokohama. 1890. p.60

²⁸ Sladen, Douglas. *More Queer Things About Japan*. London. 1904. p.97

²⁹ Piggott, Francis. *The Music and Musical Instruments of Japan*. London. 1909. p.17

³⁰ Scidmore, Eliza Ruhamah. *Jinrikisha Days in Japan*. London. 1891. p.99

時、舞台付きの新館も増築されており、本館、新館、そして能楽堂がみな、外国人のあいだで「紅葉館」として知られていた。

次に紅葉館や芝能楽堂での外客観能に関する記述がほとんど見えなくなる。「東京日日」の記事には、1892年（明治二十五年）11月に、メキシコ公使夫妻が芝能楽堂で観能をした³¹、そして、1894年（明治二十七年）6月に当時有名なオペラシンガーだったミニ・ホークが芝能楽堂で能を觀賞し、能楽会に謝状を送った³²という記述もある。1892年から1899年まで日本で外交顧問の仕事をしたジョージ・ラッドも、その『日本の珍しき日々』³³にも能楽会の定期能楽公演のようすを描写している。

しかし、20世紀に入ると、紅葉館で見られる能楽の不評が見られるようになる。当時、紅葉館にどのような余興があったか詳細に調べがたいが、能と関係があったようである。エドワードス著の『日本の劇と役者』の能の説明がこのように始まる。

「東京の紅葉館でその娯楽のために即席で急いで上演されたノウダンスを見て、〔中略〕旅行者は、五百年以上華族の屋敷で上演され、今もたまに演じられている小さくて美しいドラマである能のちゃんとしたイメージを受けることができない」³⁴

エドワードスが能舞台のことをよく知り、紅葉館と芝能楽堂（当時能楽会所有）の区別をしたはずであるため、かれが見た能は「即席で急いで上演された」本館の宴会の余興能楽であったと考えられる。

約十年後であるが、紅葉館の能に対するエドワードスの不評に似たような意見を述べたのがヒンクスである。ヒンクスは1910年に『日本の舞踊』という本を出版し、その中に能の長くて詳しい説明がある。その最後の、能の現状に当たる部分で「メイプルクラブ」のことをいう。

「今、紅葉館で上演されている舞踊は、能の現代化したものである。しかし、古代の言葉が口語化され、所作と筋が現代化され、更に役者は男ではなく女である。この変遷が、古典の舞踊を一般大衆にする確信を拒む日本の教養階級に、非難されるは驚くべきではない。日本を訪れた外国人が皆

³¹ 倉田喜弘編『明治の能楽 2』日本芸術文化振興会、1994年、p.193-194

³² 同上、p.334

³³ Ladd, George Trumbull. *Rare Days in Japan*. New York. 1910. p.207-216

³⁴ Edwards, Osman. *Japanese Plays and Playfellows*. New York. 1901. p.39

「メイプルクラブ」の舞踊家を見に行くので、それが古代日本の舞踊に属せず、現代物であること言う必要がある。」³⁵

ヒンクスがいつ日本を訪れたか、明らかにされていないが、初版が1910年で、芝能楽堂の舞台が靖国神社に寄付されて8年後のことである。能の言葉が口語化されるのも、当時の役者が女性であるのも当時の能ではとても考えられないことである。能を基にした舞子の上方舞のことをいっている可能性もあり、また何らかの「アダプテーション」が仮にあったのも考えられる。

紅葉館は日本人の上流クラブハウスとして生まれたが、早く外国人の必見スポットとなった。外国人に日本文化を教え、その風習を体験させるのに大事な役割を果たした。明治期に訪日の外国人の間では紅葉館が三つのことで知られていた：一つは純粋な日本饗応、もう一つは舞子、そして三つ目は能楽である。後者の二つは当時欧米人の感覚では「舞踊」だったためか、紅葉館の余興のしかたに問題があったためか、勘違いされることがあったようである。にもかかわらず、紅葉館（能楽堂も含めて）が当初の外国人に饗応とともに、日本風習、そして能楽を初め日本の舞台芸能を紹介したことは、見逃してはならないことである。

³⁵ Hincks, Marcelle Azra. *The Japanese Dance*. London. 1910. p.22-23